境界線に着目した武蔵ヶ丘ニュータウンの都市開発に関する研究

熊本県立大学環境共生学部　　学生会員○春野正成　　熊本大学政創研　正会員　田中尚人

１．はじめに

武蔵ヶ丘ニュータウン（以下武蔵ヶ丘 NT）は熊本県熊本市と熊本県菊陽町の境界線上に存在しており、武蔵ヶ丘団地を分断する形で市と町の境界線が横断している。現在はこの市と町の境界線における武蔵ヶ丘団地の分断による問題の把握や現状の把握が行われておらず、分断が与えた影響は未だに明確化されていない。

本研究では、熊本市郊外履歴を記述することを目的とする。市町の境界線及び武蔵ヶ丘 NT の境界線に着目することで、郊外部の開発、郊外形成の変遷を分かり易く的確にとらえることができると考えた。

２．郊外化のメカニズム

本章では、近代の日本から発生した郊外モデルの提示を行い、熊本市における郊外形成の概要を整理した。

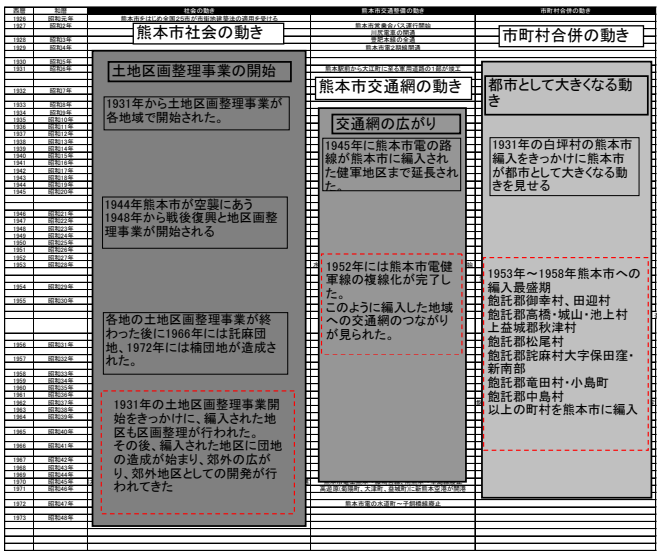
(1) 郊外化への流れ

近代日本において日本は第二次世界大戦後に高度経済成長期を迎え、都心部の人口増加や工業の発展、都心部の就業人口増加を経て都心部における住宅不足、新規住宅建設の困難が生じた。そのため人口が郊外へと分散し、都市化の流れと共に大都市周辺を覆っていく形で郊外化が進行してきたといえる。

(2) 熊本市における郊外

表 1 より、1931 年から町村の熊本市への編入・合併が始まっている。これは熊本市が都市として大きくなる動きを見せている。1960 年代に入ると、区画整理事業と共に編入・合併した地域に団地の造成が始まっている。後を追うように武蔵ヶ丘 NT 周辺にも団地の造成が始まっている。これは熊本市において郊外地域の広がりが始まっていると考えられる。

表１　熊本市の都市開発年表



(3) 本研究の位置づけと境界線の定義

武蔵ヶ丘 NT における研究としては石川の研究や境界線に着目したものでは中川らの研究がある。既往研究においては境界線と郊外形成を関連付けたものはあまり見られない。そこで本研究では熊本市と菊陽町の境界線を熊本市における都市問題の最前線であると捉えて、地形図、都市計画図を用いた分析・考察を行う。郊外の開発を歴史的かつ視覚的に整理する点に特徴があるといえる。

３．　武蔵ヶ丘 NT 周辺における開発の履歴

本章では、武蔵ヶ丘 NT 周辺における郊外としての広がりを整理した。そこで都市形成について 25000 分の 1 の地形図を用いて示す。都市形成や郊外化の動きを視覚化する。

(1) 武蔵ヶ丘 NT 周辺の概要

武蔵ヶ丘は熊本市北東部から菊陽町に跨っている広大なニュータウン区域の拠点である。1970 年代初頭に熊本ではまだ珍しかった高層集合住宅を建設し、これを核としてその周囲に一般住宅や公園が取り巻くニュータウンが形成されていった。この付近の境界線は非常に複雑になっており、境界線の境目が人目にはわかりにくくなっている。菊陽町には「菊陽町武蔵ヶ丘○丁目」という地名があるが、熊本市にも「熊本市北区武蔵ヶ丘○丁目」が存在しており、住民の混乱を招いている。

(2) 武蔵ヶ丘 NT 周辺の成り立ち

武蔵ヶ丘 NT は 1970 年代に熊本市街化区域、市街化調整区域に菊陽町が指定され、武蔵ヶ丘団地が造成されだしたことから、本格的に NT としての成り立ちが見えてくる。

図 1-①より 1940 年代にはまだ森林などが広がり、住宅などもまばらに存在しており、あまり手が加えられていない。この時期は菊陽町として合併する以前のもの

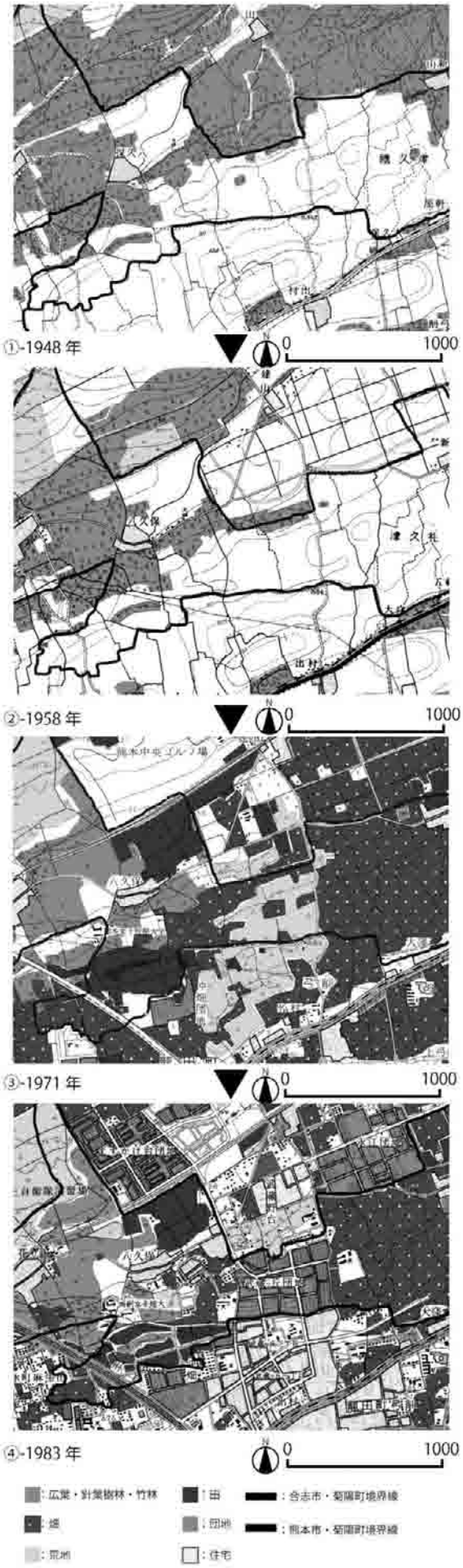


図-1 武蔵ヶ丘 NT 周辺の土地利用変遷図

であり、図 1-①に見えるのは菊池郡津田村と熊本市における境界線である。1955 年に菊池郡津田村、原水村、上益城郡白水村が合併して菊陽村となっている。

図 1-②より 1950 年代には広葉樹林が切り開かれ、平地となる部分が増えている。この時期には菊陽村が町制の施行により、菊陽町になり町として大きくなる動きの 1 つとして開発が行われてきたことが読み解ける。

図 1-③より、沖畑団地が造成され、周辺にも徐々に住宅が増えている。さらに小学校が建設され、人口の流入も見られるため郊外としての開発が顕著に現れてきていることが分かる。

図 1-④より、武蔵ヶ丘団地、すずかけ台団地、永江団地の造成も完了し、周辺の住宅も非常に増えていることがわかる。小学校や大学も建設され、武蔵ヶ丘地区が NT としての開発がほぼ完了したことがわかる。このように地図を利用して変遷を追うことで武蔵丘 NT 周辺の郊外としての広がりを視覚化することができる。

４． 境界線に着目した武蔵ヶ丘 NT 周辺の空間分析

周辺にある菊陽町に属している光の森ニュータウン、熊本市に属している龍田ニュータウンとの比較分析を行い、2500 分の 1 の都市計画図を用いて変化の履歴を詳述する。

(1) 調査・分析手法

第 3 章で用いた地形図をもとに境界線の変化している部分を抽出する。その変化点を 2500 分の 1 の都市計画図を用い、詳細なスケールでの土地利用変遷を追う。さらに変化点の現地調査を行い、現状の把握を行う。

(2) 分析と考察

武蔵ヶ丘 NT 周辺で特に境界線が変化していた部分は図 1 西南部に見える龍田 NT 周辺であった。この場所は菊陽町と熊本市の境目に属しており、各年代においても変化が見られた。龍田 NT 付近には 1970 年代に団地が造成され、1980 年代には住宅地が増加しており、郊外としての開発が顕著に見られると考えられる。

５．考察、まとめ

本研究では，熊本市郊外の履歴を歴史的に整理し、郊外の変遷を地形図・都市計画図を用いて視覚化することができた。

[参考文献] 1) 菊陽町史　菊陽町教育委員会　1997, 2) 新熊本市史 通史編　第 6 巻